

研究のまとめ

1 教科領域研究テーマ

言葉による深い学びを通して「エージェンシー」を育む学習指導と評価の工夫

2 成果（○）と課題（●）

(1) 「エージェンシー」を発揮する場面の設定

- 「目標設定→計画→学習→振り返り」という学習過程の中で、単元について生徒と共に意思決定したり、生徒の学びをもとに修正したりした。教師が一方的に単元を設計して教える授業から、生徒と教師が対話や振り返りを通して単元での学びをよりよいものにすることができた。私たちは「エージェンシー」を「現状をよりよくする力」と定義している。「単元での学びをよりよいものにしていく」ことは、まさに生徒の「エージェンシー」発揮につながったと言えるであろう。
- 「エージェンシー」を発揮する上で、大きく三つの場面が有効であったと考える。「学習課題を設定する場面」「学習課題の解決の順序や手立てを検討する場面」「学びを振り返る場面」である。「学習課題を設定する場面」では、生徒の「問い」から出発し、学びが進められるよう授業をデザインした。自分たちが立てた「問い」だからこそ、当事者意識を持ち、前のめりになって対話する生徒の姿が見られた。また「学習課題の解決の順序や手立てを検討する場面」では、生徒が課題解決の筋道を計画できるよう授業をデザインした。これまでの学習経験を生かし、学習方略を工夫する生徒の姿が見られた。非効率的とも言える課題解決の場合もあったが、修正したり調整したりすることがメタ認知能力の育成や「エージェンシー」の発揮につながったと言える。なお、「学びを振り返る場面」については、この後の項目で述べることにする。

- 教科教育である以上、学びを支える「知識及び技能」を教える授業も必要である。教師が教える授業と「エージェンシー」を発揮して生徒が学ぶ授業のバランスを考えなければならない。研究2年目の段階では、「どの学年段階で」「どのバランスで」行うかというカリキュラム作りまでは整備できていない。来年に向けての課題である。

(2) 「エージェンシー」を育む振り返りの工夫

- OPP シートは、学びの変容を捉える意味でも、課題解決の筋道を確認する意味でも、生徒にとって有効なものであった。
- OPP シートを活用して、授業での振り返りを次の授業につなげたり、単元を通しての振り返りを次の単元に生かしたりすることができた。また、授業づくりや単元構想の際、授業中に発言できなかった生徒が、どのような学びを得ているかを知ることができた。したがって、教師にとっても有効なものであった。
- OPP シートのやりとりをデジタル上で行ったことで、生徒も教師も、互いの手元で学びの深まりを共有することができた。

(3) 「エージェンシー」を育む言語技術の育成

- 週1回の言語技術の時間に「問答ゲーム」をしながら、言語技術に関する知識や技能を習得した。「情報伝達の技術」や「情報分析の技術」、「認知の技術」など、系統的に身に付けた言葉の力を対話や振り返りに生かそうとする姿が見られた。生徒たちは、その対話や振り返りを通して「単元での学びをよりよいものにしていく」ことができた。したがって、言語技術の育成が「エージェンシー」の発揮につながったと言える。
- 身に付けた言語技術が、どの単元のどの授業に生きたかまでは明らかにすることができていない。カリキュラム作りとも関連するが、「エージェンシー」の発揮や国語科での学びとの関連を具体的に示していきたい。

3 次年度に向けて

この2年間、言葉による深い学びを通して「エージェンシー」を育成しようと、学習指導や評価について研究を進めてきた。その中で、「生徒が学びたいこと」「生徒が考えたいこと」を大切にしながら、生徒と教師が共に単元や授業をデザインすることができるようになってきた。課題でも述べたが、研究3年目となる来年度は、それらの学びをカリキュラムとして整備していきたい。授業をしていると、生徒が他教科での学びや概念を関連付けながら発言することがある。現段階では、学びの副産物と言えるかもしれないが、生徒は他教科での気付きや学びを生かしながら、授業に取り組んでいる。カリキュラムを整備する中で、他教科との関連やつながりを可視化することにも挑戦できればと考えている。